東京家政学院筑波女子大学紀要第４集　(11) ～ (21) ページ　2000年

『武道伝来記』論　その三

佐々木昭夫

九

巻二の第二「見ぬ人臼に宵の無分別」で、直前の二話にあった作者の高揚した気分は影をひそめ、以後ひたすら冷静かつ客観的に侍社会の葛藤を描く諸篇が続く。

岡崎義恵氏は西鶴の作家としての「熱情」の表現が「我々の詩精神に訴へ」それが一篇に「漲る感動の進行」を生むと言う。また巻一の第四「内儀の利發は替た姿」と『武家義理物語』の「表むきは夫婦の中垣」の二篇を例に挙げ、「西鶴が此處であらはした詩精神は感激の美に外ならないのである」と明言する。(1)

巻一の第四に続いて巻二の第一も引き続いて西鶴の詩精神が、少年少女の（いや少年は間もなく死んでしまうから少女の）直接的で激情的な恋という対象のうちにみずから飛び込み、彼らの運命を我が運命とし、少女への限りない賛美のうちにその恋の成就を祈念し、それを充分読者に伝えているからいかに私的な情熱であろうともこれまた「感激の美」の表現だろう。巻を異にしながら二話続いているのだ。ところがこれは以後ほとんど完全に、少くともこの二話のように純粋な形では、姿を消す。深い感銘を与える作品は以後も出てくる。我々読者が文学作品として優れていると感じる諸篇はみなそうだろう。中には巻五の第三「不断心懸の早馬」のようにこれまた「感激の美」の表現ではないかと思われるものもある。だが、それでも巻一の第四とはやはり微妙にまた根本的に違う。後に巻五について記すときに細説するが、巻一の四、巻二の一のように作者の必死の賛美が生む疑問の余地の無い純粋さはここには無い。

本論で前に（八の末尾）、『武道伝来記』で作者西鶴の気分が高まるようなことはもう見られず、作者と作品との内的なつながりの感じられる各篇は、憤怒のほかはすべて深い観想といったものになる」と書いた。だが憤怒のあからさまな表現といってもごく僅かである。例えば卑劣な侍たちの滑稽あるいは残虐な行為を記すにしても西鶴は極力自己の感情を抑え、一見驚くほど冷静である。また「深い観想」と言ったが、一篇の末尾の「あはれなり」「あはれをとゞめける」等の語が単なる言葉だけでなく実感としてどれ程の深さで読者に感じとれるか、その程度は様々であり、ひとつひとつのニュアンスさえ異なっている。

ところで『武道伝来記』は巻二の第二以降急激に質の低下を見せ、巻三の第三までの六話、内容はきわめて多様に変化しながら、また価値に多少の上下はありながら概して低調と言わねばなるまい。巻一の第四、巻二の第一があのように語り手がとくに精神を高揚させ、作者自身が自らの若々しい感動を隠そうともしていな

い印象を与えるため、続く第二の、描いている対象への作者の感情的かかわりの欠除という前記のような性格がとくに目立つのだろう。

前に言ったように、巻一の第一、第二とまことに立派な侍の像を疑念の兆す余地なくそのまま完全に肯定して描き、第三で主人公の行為と死は侍としてはまことに賞賛すべきものであるのに、遊女太夫の激越な真の恋愛と死を併置することによって侍の倫理は否応なく相対化され、それは溯って第二の主人公の正義の行為も、これはあまりに過酷だったかも知れぬという疑念を生む。だが、次の第四では一転して二人の主人公の姿が、いわば絶対的な正しさなるものが存在し得る事実を教える。そして次の巻二第一では、私的な次元に移ってはいるが、読者はここでも感情移入などの心理の動きを促され、主人公の行動に完全に共感しているから、その正しさは否定できない。以上巻一の四話、それに巻二の第一まで加えた五話を読んだあとではこの五話それぞれの価値基準の振幅のあまりの大きさのため、読者は以後次々に書かれる侍たちの行動が善悪美醜さまざまであろうとも、判断を誤ったり読み間違えたりするような事はあまりない。巻二の第二で仲違いした親友二人が必死に斬り合っているのに、亡霊の出現によって再び友情を恢復し、身を捨てて共に敵のありかを探し、一方敵となった侍は、武勇にすぐれている筈なのに臆病風に吹かれ、相手に見付かると手を合わせて命乞いするという憐れな姿を見せ、許してもらえないということになると一転して相手の一人を斬りふせる。このような不自然さは前話までで、人間性なるものはなんとも多種多様であり、人間的価値も千差万別である事を示しきったという自信から来るのかも知れない。あるいは作者として獲得した自由を行使し、一体どこまで書けるものか試してみたくなったのかも知れない、とさえ思われる。巻二の第二がもし全三十二話の冒頭、いや巻一のいずれか一話の替りに置かれたとしたならば、この一話に対する我々読者の印象はかなり違い、不自然さ、いや奇怪さが際だって感じられたのではなかろうか。

この性格が後に続くということはない。巻二の第二だけである。巻二の第三「身躰破る落書の團」の主人公篠原文助の見せる変化には福崎軍平の不自然さは全くない。

十

巻二第三も前話に引き続いて、文芸的価値は決して高くない。どこからそう言えるか。

『武道伝来記』三十二話中、敵とねらわれる者が己の非を悔い、自ら進んで討たれようとするのはこの巻二の第三と巻四の第一「大夫格子に立名の男」である。こういうことは当時実際の敵討には決してあり得ぬことではなかっただろうが、三十二話の一話一話が、それぞれ異った敵討のあり方を題材とし、類似の話は二つとないという本作品のあり方からすると、ちょっと異例かとも思われる。ただし例えば敵討に出た者が遂に敵にめぐり逢うことなく終ってしまうという、現実にはざらにあったはずのケースは一篇もない。西鶴ははじめからそれは除外していたのだ、そうした条件のもとでこれほど性格の異なる話を三十二篇も集めるという事自体が抜きんでた才能を示すが、巻二の第三と巻四の第一のこの共通点を作者は読者にしっかり意識させようとしたのか、つまり順々に冒頭から注意深く読み進めてきた読者が「大夫格子に立名の男」を読んだあとで、「身躰破る落書の團」を必ず想起するように意図したのかは、分からない。いずれとも考えられるか

らだ。両話を隔てるのは五篇ということは、いずれとも考えられるように意図したとさえ考えられる。五話しかないのか、五話もあるのか。注意深い、それ故記憶も確かな読者でもこの二話の、この共通点に気付かない者もいようし、気付いても特に気にもとめない者もあろう。いずれも間違った読みではない。それほどまでこの二話は微妙にしかし本質的に異っているからである。我々はその差にこだわり、それを見てゆくわけだが、必ずしもそれが正しい読み方とは言えないだろう。特に本論は冒頭から順に読んでいく形を取っているからだが、ここで巻二の第三に重点を置き便宜上ごくざっと比較して論ずることとする。

「身躰破る落書の團」は「大夫格子に立名の男」のような深い感銘を読者に残すようなことはない。両話の敵役の篠原文助と青柳十蔵の行動とその描き方及びその他副次的で些細な事柄によってその差が出てくる。巻四の第一で青柳十蔵が榎坂専左衛門を切ったのは、親しい友人だった二人が藩の掟にそむき、夜屋敷を抜け出て安倍川の遊里を乱れ歩いているうちに、酒の力も手伝って口論となり切り合った結果とされている。巻二の第三で篠原文助は人も羨む美女のもとに首尾よく婿入りを果したが、年末おし迫ったころだったので、正月に同僚たちから水かけ祝いを受ける羽目となってしまう。この風習はもともとは妻を娶ったばかりの男に正月現実に水を散々浴せかけたらしいが、しばしば喧嘩刃傷沙汰のもととなったので幕府や各藩でしきりに禁令が出されたという。詳細は不明だが西鶴がここで書いているように、「金箔置の手桶五十銀箔の柄杓五十本衣裟つくしの笠鉾十二本落書の大團に竹馬壱疋籠張の立烏帽子門口に持ちかけさせいはゐましての御事と急度使を立ける」。つまり実際に水を浴せるのではなく、そのための道具のようなものを趣向をこらして作り上げ当人に贈るだけなのが侍の間での水掛け祝だったのか、これはより詳しく調べる要がある。当時の侍仲間でなら現実に大勢寄ってたかって水を掛けたりしたら、怪我人や死者が続出するのは必定だから、ほぼここに書かれた程度のさわぎに過ぎなかったと判断できる。

それでも文助は我慢することができなかった。「され共文助堪忍せず」大團の落書きの書体から従弟の千塚林兵衛の筆跡と早合点しその家に訪ねて斬って捨てる。両話とも、はなはだ不合理な筋の通らぬ憤慨であり、今少しの我慢があれば何事もなくおさまってしまったはずだ。はなはだ瑣末で偶然的な出来事が契機となって斬り合いといった重大事に至り敵討の長く苦しい事態がくり拡げられるのが三十二話の大半である。巻一第四の金塚数馬を斬った安川権之進のように公的意味でも正しい行為はきわめて数少ない。それでもやはり篠原文助より青柳十蔵の方が無理は少ないだろう。親友、とくに悪友というほど何の遠慮も気づかいもない間柄の二人の人物には猛烈な喧嘩が発生することは珍しくない。巻二の第二「見ぬ人臭に胄の無分別」の八九郎と林八の例は前に見た。あそこではいささか不自然と断定したが、八九郎の言葉その他で極端に強調していることをそう言ったので、現実にはよくあることだ。

それに反して文助の行動はあまりにも我慢が足らぬと言わざるを得まい。水掛祝がしばしば喧嘩のもととなったと言っても、ただ笠鉾その他を贈ってきただけの相手に憤慨するのも当時の慣はしだったというのか。その点充分な知識はない。だが、「見物立かさなり作り物の風流をどつと笑ふて果しける」とあり、この笑い声が文助の怒りの火に油を注いだわけだろうから、彼は相手は大勢ということも知っていたろう。多数では怒りをはらす手がかりも無いわけだから團に書かれた落書きの筆跡から無理に一人に

しぼり刃傷に及ぶという行為である。これは単なる腹立ちまぎれ、何の道理も言いわけの余地もない。しかも西鶴は御丁寧にもそれさえ人違いだったと設定している。

作家の筆の残酷さはあきれるばかりである。さらに西鶴はそれに加えて実際にうちわの落書きをした朴森新藏が「扨は我筆ゆへ林兵衛はうたれぬ。此上は文助を打て林兵衛に手向ん」と敵討に旅出し、間もなく病気にかかって他国で亡くなってしまったというエピソードまでつけ加える。敵討に出なければ病にかかることもなかったろう。あまりにひどい設定である。文助自身も林兵衛を斬ったのは人違いだったことを他国へ立のいたあと、後にした故郷のことは気になるから間もなく知ったはずで、「文助心のせくまゝにはやまりけるとばつと沙汰をしけるに」という国もとの評判は居ても立ってもいられないくらいの恥辱を文助に与えたであろう。一時の腹立ちまぎれの行為は、京そだちの美女のもとに婿入りしたという幸運も僅か十日足らずでフイにしてしまい自分の立身の望みをも完全に絶ってしまった。千塚林兵衛、朴森新藏の遺族の不幸はもち論のこと、奥田戸右衛門の年来の宿願も一気に無に帰した。文助にはあとになってそれらすべてをじっくり考え続ける時間が充分にあったはずだ。このような場合いずれは自分の行いを後悔するようになり、のちに自分を敵とねらう犠牲者の子息に自ら進んで打たれようと決心するのだろうと思われる。それは極めて自然の成行の感があり、それが人を感動させることはあまりなさそうである。

こうした文助の心境は全く書かれていず、残された林兵衛後家の惨めな長い苦労と林太郎の成長が長々と描かれる。文助は十三年後の正月に金龍寺の和尚を来訪する姿で再び登場する。

……此御寺に参詣和尚に對面して世の無常を語り出し。今日の亡者改名もなく千塚氏の何がし十三年忌に相當るなり拙者ためには従弟づからなるが不慮に相果ける御吊ひあそばされ給はれと涙をこぼす。

林兵衛の供養に来たということ、和尚との会話で「世の無常を語り出し」たこと、「涙をこぼす」という動作、それらから窺われる文助の心境はきわめて明瞭であり読む者はいわば当然のことと受け取ってしまう。そこに何らの驚きもない。作者西鶴が努力してそう書いているわけだ。

巻四の第一での青柳十藏の書き方は大きく異なっている。

十藏首尾よく專左衛門うつて捨。取まはしよく立のき屋敷にかへりさたなしにして世上を聞あはせける。

この最後の一句「世上を聞あはせける」にはなんとなく狡猾で陰険な人物像が示されている。その後敵は十藏と知れて專左衛門弟專兵衛が十藏をねらい始めた時の十藏の反応「此さた屋敷に聞えて十藏妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて」も最初の印象を強めるばかりである。ところがそれから更に何年か経って專兵衛の息子專太郎が十藏を敵としてねらい始めたと知った時の十藏の思いに読者は驚き、多くの事を知らされ、次第に深い感銘に打たれる。

此事十藏傳へ聞て若年の氣をつくし。我を打べき所存專左衛門子なりつら〳〵世の有様を觀ずるに蒐角は夢に極まれり我專左衛門を打て後其まゝ切腹すべきこそ武道なれ。さもしき

心底おこりて世をしのび人のそしりを請ぬる事もよしなし。我かたより名乗出て子細なくうたれて専太郎が本望をとげさすべしと。

これはまことに表現力に富んだ一文である。十藏の心境が語られるのはこれが初めてだから、読者の注意を強く惹く。簡単に書かれた行動は「狡猾で陰険」な印象だった。ここで知らされる心境は全く違っている。過去の自分の行為についての単なる悔恨などというものでもない。「つら〳〵世の有様を觀ずるに菟角は夢に極まれり」という思いはこの時急に発したものではあるまい。専左衛門を打った瞬間から胸中に萠し、人々に蔑まれ、自分でもさもしさを自覚しながら世をしのび身を隠している年月の間に、心を占めるようになったのだろう。巻二第三の文助の「和尚に対面して世の無常を語り出し」という姿から辛うじてうかがわれるのも同じような思いだった。巻四第一では根本的に違うのはそれに先立ち「若年の氣をつくし我を打つべき所存専左衛門子なり」の言葉があることだ。この言葉の意味するのは、種々雑多で複雑な強い思いが入り乱れた心境である。十三才という若さで苦難に耐え自分を打とうとしているとはさすがに専左衛門の子だという讃歎の思いがまず強いだろう。十藏が専左衛門に子がいたことを知らなかったかどうかは分からない。最後の「専太郎が本望をとげさすべし」からたぶん知っていたのだろうと感じられるが、知っていても意識から消えていたのかも知れない。いずれにせよ十藏の驚きとそれに続く強い懐かしさの感覚、それを読者は感じ取らなければならない。そしてそう読者が感じ取り得るのは逆に「つら〳〵世の有様を觀ずるに菟角は夢に極まれり」が引き続き置かれているからである。

極端に簡潔な語句は、その簡潔さゆえにまことに豊かな内容を表現し得る。語句と語句が呼応し合っているのだ。「専左衛門子なり」にこめられた懐かしさを中心とした万感の思い、その無限の重みはこのくだり全体がこれほど言葉少なに書かれているからこそ表現されたと言える。親しい友を斬ってしまった男の悔恨の孤独感、侍としての栄達の道も自ら断ってしまった空しい寂寥の思い、なんとか罰を逃がれようとした「さもしき心底」の自覚、この男の生はこのように侘しく虚ろで荒れ果てたものだった。そこへ不意に聞こえてきたのは専左衛門の子が自分を敵とつけねらっているという噂である。それは暗い空から射す一筋の希望の光明のように感じられ、この男は亡友の遺児になんとかして打たれようと必死に出逢いを求める。

巻二の第三「身躰破る落書の團」の文助の書き方はこれとは違っている。前にも述べたように金龍寺の和尚と対面して「世の無常を語りだし」林兵衛の菩提を弔うことを依頼し、故人は「拙者ためには従弟づからなるが不慮に相果ける御吊ひあそばされ給はれと涙をこぼす」とされている。巻四第一の十藏と同質の心境である。だが文助は外側から書かれ、十藏の深い心境はない。この差は大きい。それに十藏の思いの方が強かったとも言えるだろう。十藏は自分が専太郎に打たれることこそ、この空しい世で自分に残された唯一の生の意味と知り必死に出逢いを求める。そのようなことが文助にはない。だが思いの強弱よりも重要なのは文助のそれは書かれていないという事である。それに事の発端となった文助の行動は馬鹿〳〵しいほど軽薄、無思慮だったから、たとえ彼のその後の内面が深く掘り下げて書かれたにしても同情を呼ばなかったであろう。それにもともとそのことが、文助が読者の同情を呼ばないことが、作者の意志だったと考えられるのだ。再登

場する文助の姿「樒枝なから手折て小者にもたせ。其身は十徳に朱鞘の大脇さしひとつにて」という記述にもなにかふてぶてしさが現れている。林太郎が和尚と対談中の文助に小脇指を抜いてとびかかると「自休さそくきかして。其手を取て引ふせければ」の文助の態度も、さらにそうしたまま和尚や林太郎に事情を説明するその言葉も、決して読者の感嘆あるいは同情を引くようなものではない。

自休はすこしもおどろかずいつれもしづめて。是には様子の御入候事なり。汝は林兵衛が性子なるへし林兵衛寂後の時分二才にて有しかそれより十三年過ぬれば今年十四歳なるへし兼て存じけるにも十五にならば定て我をねらふべし其節は此方より名乗出心まかせにうたるへきと諸神かけて覚悟せしに今爰に居合せそれがしに出あふ事其方武運にかなふなり寂前申あけしは此者の親が義なり。林兵衛草の陰にてさぞ姪しからん。さあ本望をとげよとて林太郎が劔を持そへ我腹に差とをし目前の夢とはなりぬ。

「其方武運にかなふなり」「さあ本望をとげよ」等の言葉の端々にも傲然たる性格があらわれている。このせりふは林太郎を引き伏せた姿勢で発せられているのだ。

巻四第一の青柳十蔵は全く違っていた。生前十蔵は遂に専太郎に逢うことはできなかったが、掘り起こした十蔵の死骸に専太郎が「榎坂専左衛門が世忰専太郎なるが親の敵のからだなればうつ」と声をかけると「十蔵死骸眼をひらき笑ひ頷して首さしのはす」と書かれる。これは怪異現象などではなく、十蔵が専太郎に打たれることを自分に残された唯一の至福としていかに待ち望んでいたか、その強い念願の表現である。さらに死骸の差していた刀を調べると刃をつぶし目釘竹をはずしてあったという。専太郎と斬り合いの形になって討たれようとしたので、文助のように自分の意志を高らかに宣言して死んだのではない。「さあ本望をとげよとて林太郎が劔を持そへ我腹に差とをし」とはいくら相手の劔であろうと、また「持そへ」と林太郎の手もその劔を握っていようと、ほとんど切腹ではないのか。

敵を打つ方の人物、つまり林太郎と専太郎の描き方もずいぶん異なっている。林太郎は文助の死にも心を動かされることはない。「林太郎と丶めをさして親の敵を討事を悦び其首をうつは物に入御寺に御暇を乞捨又備前の國にくだり」。実際は自分が打ったわけでもない相手の死を敵討成就と大喜びし、相手の心情を思いやることなど全くなく、世話になった寺にも「御暇を乞捨」と、もうこの寺にも用はないとばかりそそくさと別れの言葉を投げ捨て、という軽薄言うに足りぬ人物として書かれる。巻四の第一の専太郎は林太郎と同じ年輩、十三、四だがまるで対照的な人物である。十蔵が専太郎に逢おうとして遂にならなかったので、わが故郷出羽の観音院で待っていると興津川畔に立てた札を見た専太郎は「十蔵殿心底うたがふましきは清見寺迄尋ね出られし所男なり」と観音院の住持の説明と照らし合わせて、十蔵の意図もそれがいかに貴い価値を有するかも理解する。もっと幼い頃の姿もはっきりと描き分けられている。専太郎は「其後専太郎九歳になればおとなしく伯父専兵衛を恨み母をかなしみながらへてせんなしと。命を捨るを抱と丶め」敵十蔵を探して旅立つときには、「いづれもに暇乞て思ひ立行心入石流侍の子也とてをの〳〵涙にくれける」とまわりの田舎人たちの心も動かすいじらしさで、大人びてこの世のあわれも深く感じ取ることのできる心を持った少年として書かれる。十蔵を理解し、許すことのできる少年である。

一方、林太郎の方は十一才にもなって「浦邉の業を見ならひ塩にて馬刀を取貝ひろふなど姿から心までいやしくなりぬ」とされている。「いやしくなりぬ」とはほとんど読者にとって衝撃的とさえ言えるが、専太郎が父に死に別れたのが七才で母のかなしみもなんとか感得できる年になっていたのに、林太郎は二才ということで、合理的には説明できる。それにすぐその後、「津の国金龍寺にのぼしおかれけるに。石流筋目をあらはし外の兒よりおとなしく」と書かれるから衝撃も少しは薄らぐ。

林太郎と専太郎のこのような違いはそれぞれの敵。篠原文助と青柳十藏の違いに呼応している。いや林太郎と専太郎をあのように描き分けることによって、文助と十藏の人間像と行為の性格をより明確になし得たのだ。これは主人公および敵の討ち手という重要な作中人物ばかりではない。他にも多くの事柄が同じ役割を果たす。最初のきっかけとなった事情が巻二の第三では水掛祝という騒がしく軽薄でインチキくさい出来事だった。それに対して巻四の第一で専左衛門と十藏の喧嘩の起こるのは阿倍川のにぎやかな女郎町―とは言ってもこれは今日ではすっかりすたれてしまっているから、人々の思い出に残るばかりのありし日の歓楽境ということで、そのさわがしさが何か夢幻のヴェールにつつまれている。

吸付莨莨の煙富士を夜見る女郎町。安倍川のさはぎ三嶋屋が格子の前に。立かさなり聞耳を駿河なる時花太夫。相模吉野がつれ哥かはりさんさのふしも。色にうつりて人皆悩みふかく。身袋やぶれ菅笠とうたひしもふるきむかしとはなりぬ。

と、美女たちが唄い、聴く者に悩ましいあこがれの思いをかき立てたかはりさんさの節、それも遠い過去のものになってしまったとされ、冒頭部の文章に郷愁の色濃い詩情が漂う。一話の冒頭、短くとも工夫を凝らした文に始まることは三十二話中に多く、その一話が過去の出来事である事を明示、暗示するのが普通だが、音曲が過去の薄靄に覆われるというのはここだけである。これは巻四第一の暗く沈んだ物語全体にいかにもふさわしいと言えよう。それに対し巻二第三の水掛祝は極度に現実的かつ散文的で、主人公文助のあゝした姿を描くのにぴったりの描き方である。かつては間違いなく卑劣漢と言えた青柳十藏も、その孤独な心情を知ることによって、読者は自ら進んで討たれたいという彼の意志を充分高い価値あるものと認め、深い感銘に討たれる。それに反し文助の場合は作者は読者がゆめそうした心理におち入らぬよう細心の注意払っているのだ。そうしてそれはおそらく林兵衛未亡人に読者の関心をより強く引きつけようとしたからである。夫が不意に討たれた時妻がまだ幼い男の子を育て上げ、やがて敵を討たそうとする話は『武道伝来記』中に何話もあり、それぞれニュアンスは違うが共通するのはそれがいずれの場合も大変な苦労を伴うという事実である。多くは突然生じた事態であり、運命の激変を伴う。「うき世に武士の妻女程定なきものはなし」である。この巻二第三でもその長年の苦労のほどが詳述されている。二歳の林太郎を連れて国を異にする家里に帰るが、母は亡くなっていて継母には腹違いの妹が三人もいるという状況で、なんとか如才なく対応して切りぬけるという毎日だったが、やがて林太郎を抱いてその家を出、隣国へさまよい行き、昔、我が家に仕えていたが今は漁師をしている男のもとを頼る。武士の妻に生じる運命の激変を下層の人々は深い同情を持って見守るという事が西鶴にはしばしば見られるが、この漁師も林兵衛未亡人を自分の妻の姪と

いうことにして世話をしてくれる。こうした苦しい日々を送りながらも、亡夫の面影を片時も忘れず、「悪や其文助目を林太郎成人してうたせ給へと諸神に大願をかけて心の劔をけづり利道の一念骨に通て此勢ひ千尺の岩屋に籠七重の鉄門をかまへたり共安隠にはおかし」と激しい復讐の執念が内心に燃えさかっていたことが書かれる。未亡人の思いがこれほどの激しさで表現されているのは他にはない。巻二の第一でさえ小督の甚平への憎悪が露骨に書かれるようなことはなかった。文助が進んで林太郎に討たれ、林太郎がその首級を母親に見せたとき「年來のおもひを此時晴し給ひぬ」さしもの復讐の執念もきれいに消え去った。この一話もここで完結していたなら『武道伝来記』中一、二を争う散文的な物語で終ったであろう。だが後日談として林兵衛未亡人のもとへ文助未亡人が夫の敵討として斬り入り、林兵衛未亡人に引きすえられて懇々と説得され自分の短慮に気づき、道理をさとり、林兵衛未亡人と共に出家し、共に草庵に祈りの日々を送り、林兵衛・文助の跡をとむらった。林太郎も法体となって一生無言の行者となり二人の尼をいたわったという結末になっているため、一話の俗悪さはかなりの程度弱められている。林兵衛未亡人が文助未亡人を引きすえながら言う言葉は、少し前に同じ姿勢で、つまり林太郎を引きふせて文助が言った単なる宣言としての言葉とは違い、相手を説得するものだった。「いかに女なればとて道理を聞わけ給へ」以下の林兵衛未亡人の言葉はまさに道理と言うにふさわしい。今日の我々には常識とさえ思われるが当時の武家の一般にはどうだったか。「夫が討たれたことの恨みとおっしゃるなら私の方こそあなたへ言うことではありませんか」以下

妻うたれての恨みをいはゞ自こそこなたへ申べけれ。元林兵衛殿を文助殿討てのき給ふを林太郎が親の敵うてばとて我らを其恨みはふかくなり。文助殿あやまり給ふ心ざしあらはれ此たび討れ給ふ首尾石流武士の正道なり。

文助の首級を見たことで「年來のおもひを此時晴し給ひぬ」とは、物事をここまで透徹した眼で見ることを可能にした。おそらくそれがこの一話の眼目なのだろう。あれ程激しく文助を憎んでいた林太郎未亡人が自分にはもう夫を討たれたことへのこだわりももう残っていないと言う。進んで討たれる気になった文助の心事を推しはかり、それこそ武士の正道を行くものとして深く感じ入ったことが分る。言葉は更に進んで、

うつもうたるゝも先生よりの因果今もって何か互ひに恨みはなしかく手に入ければ御命取事やすけれ共さりとは〳〵われは格別の心中自をころし給ふが本意ならは。思ひのまゝにし給へと心の劔を捨て至極を段〻いひ給へば。

文助未亡人が説得されいっしょに出家する気になったのも当然と思える。なにか無思慮で軽薄な所のある林太郎まで「一生無言の行者」になったとは、いささか極端のようにも感ぜられるが、もち論これはひたすら母親の影響で、母親の姿や言葉の影響力の大きさを表現しようとするものだろう。

以上この一話その大半はかなり散文的で、篠原文助の自ら敵として討たれようとする決心も読む者を感動させるなどということは全くない。子細に検討したようにそれは作者の意図だった。文助を討った後の林兵衛未亡人の「うつもうたるゝも先生よりの因果」という悟りをことさら際立たせて読者に訴えようとしたのだ。

この一話だけ読めばこれは敵討なるものに対する作者の考え方を端的に示していることになるが、例によって西鶴ではこの一話にのみ当てはまる真実である。「思ひ入吹女尺八」には通用しない。林兵衛が討たれたあとの妻の苦労は前にも述べたように詳しく書かれているが、なにかいわば庶民的な卑俗さとさえ言えるところがある。それも文助を討って後に彼女が達した悟りの境地の庶民的論理での正しさとぴったり適合している。

以上巻二の第三を総括するとこうなる。この一話は決して優れた一篇ではない。その理由は発端となった出来事が些小で馬鹿〳〵しいばかりではなく、その馬鹿〳〵しさが特に強調されているということと、そのため本来なら読者にある感動を与える筈の文助の殊勝な決心が決してそうはならなかったことである。それは作者西鶴の意図に違いないのだが、その意図が作品の価値を低下させたとは言えないだろうか。作者は対照的に林兵衛未亡人の長年の苦労と復讐の執念、それがついに成し遂げられた時の澄み切った心境と宗教的な高い境地、それを力をこめて書いているが、すべての発端となったあの事件をあれ程巧妙に描いたためその影響は最後まで残り、読者の感銘をさまたげるのだ。林太郎の変貌に我々が奇異の感を持つのもその証拠である。

十一

巻二の第四「命とらるゝ人魚の海」で、人魚なる生類は冒頭、次のように書かれている。

奥の海には目なれぬ怪魚のあがる事其例おほし後深草院寶治元年三月廿日に津軽の大浦といふ所へ人魚はじめて流れ寄。其形ちはかしらくれなゐの鶏冠ありて面は美女のごとし。四足るりをのべて鱗に金色のひかり身にかほりふかく。聲は雲雀笛のしづかなる音せしと世のためしに語り傳へり。

「語り傳へり」と噂に尾ひれがついて次第に極端に変形されてきた姿としては、さほど奇怪ではない。「怪魚」というが珍しい海獣といったところである。そのあとこの一話に実際に登場する人魚はなんの描写もされていない。

白波俄に立さはぎ五色の水玉数ちりて浪二つにわかりて人魚目前にあらはれ出しに。

舟の人々はみな仰天したが中堂金内が矢を放つと「手こたへして其魚忽ちしづみける。それより高浪静になりて」とある。これはかなり大型の生物というだけで、面が人間のようだったなどという怪しさは全くない。ごく普通の海獣である。当時腦肭臍などは薬用その他貴重な海産物として知られていたらしいから大阪町人出身の西鶴が知らないはずはなく、その乾物や皮などを見たことがあるかも知れず、人魚なるものもこうした海獣のもっと珍しい種が言い伝えられたものと合理的に解釈していたのだろう。この作品に出てくる人魚は天変地異など凶事の前兆になったり、その肉を食うと長寿が得られるなどといったことのありそうな代物ではない。ただし題名の「命とらるゝ人魚の海」は金内の死がいかにも人魚を射た祟りだったかのようにも思わせるし、挿絵の人魚は胸から上は完全に女体で、当時の通念の人魚なる代物は大槻玄沢が『六物新志』で西洋の人魚を紹介する以前から、やはりこのようなものだったかと思わせる。挿絵としてはこうしか描きよう

がなかったということもあったろう。本文とは大きく異なってはいるが他にも挿絵では物言いたげにこっちを向いている人魚を金内が鉄砲でねらっていて、半弓で射止めたという本文の記述とこれも食い違っている。こちらの方のひと目でそれと分かる食い違いは、人魚の姿の本文との大きな違いに読者の注意を向けようとでもしたのか、ともかくこの二つの点には共通点があり、作者西鶴の意図によることは間違いなかろう。

さてこの一話で目立つのは青崎百右衛門である。「今年四十一迄いまだ夫妻もなく世を面白からずわたりぬ」いつも不機嫌で意地悪かつ我が儘ばかり言っている。西鶴の言う「悪人」のひとつの典型で、まことに生き〳〵と活写されている。

金内此度人魚の事を偽りのやうに申なし。惣じて慥に見ぬ事は御前の御耳に立ぬがよし。鳥に羽有魚に鰭有。それ〳〵に其身かしこく自由にならぬためしには拙者が泉水に金魚有。わづか四五間の浅水を楽とするに此程雀の小弓にて二百筋ばかりもゐかけしに。是にさへ當らぬ物兎角生物には油断がならぬ世に化物なし不思儀なし猿の面は赤し犬には足が四本にかぎると。檢校の下座に相勤しを物語の相手にして。無用の高聲

これは金内がその場から立ち去ったあとのことだろう。でなければすぐ斬り合いになったに違いない。憎々しげな声高の口調さえ耳にきこえて来るような生々しいこのせりふの前半は、金内が人魚を射たはずがない、嘘っぱちだと言い立てているわけだが、間違いのない事実だということはすでに読者は知っている。だが内容は次第に移ってこの世には不思議な生類などいないという主張に変る。するとその座にいた野田武藏が我慢しかねたかのように百右衛門に向かい、貴殿の知っている狭い世界ではそうなのかも知れないが、この広い世界には何が住むか分からないのだと言い、三つの例を挙げる。

古代にも人王十七代仁徳天皇の御時飛騨に一身両面の人出る。天武天皇の御宇に丹波の山家より十二角の牛出る。文武天皇の御時慶雲四年六月十五日に長八丈横一丈二尺。一頭三面の鬼異国より來る。かゝる事共も有なれば此度の大魚何かうたがふべき物にあらずと。分別臾にて申ければ。

この三つの例はいずれも、いや少くとも第三の例など馬鹿〳〵しいほど荒唐無稽、具体的イメージを思い浮かべる事さえいささか困難だろう。西鶴は意図的にそうした例を挙げたのだ。金内の射とめた人魚はこうした怪物とは全然別物である。むしろ百右衛門の「世に化物なし不思儀なし」の方がこの場合より真実を衝き、あの人魚にも当てはまるかに思われる。特に野田武藏が相手をいさめようとしていかにもしたり顔に「分別臾にて」言ったという滑稽さだからその感は強まる。

とは言え別に金内が作り事を言ったわけではない。考えてみれば同僚に百右衛門のような悪人がいた場合、金内ほど不運な男はいないと言える。人魚と言われる珍しい大魚を射殺したなら上司に報告しないわけにはいかないだろうし、報告された方も皆これはめったにないお手柄だ、殿様にも申し上げようと言うのも当然だろう。そのとき同僚に百右衛門がいて一見もっともらしい理屈を挙げて、金内の言葉を作りごとのように言い立てたらどうするか、百右衛門の言い分を認める者もいるのだ。「世間の人心なれ

ば。百右衛門悪敷と沙汰するも有。又金内何事か申もしれずと笑ふも有」百右衛門を打ち果したりすればますます虚言かと疑われる。射った人魚の死骸をなんとか探し出すよりなく、見つからなかったら窮死のほかはあるまい。百右衛門はまことに憎むべき存在となり、娘と妾による敵討はこの上なく正当と感じられる。ところで娘は病死とのみ思いこんでいた父の死が、実は百右衛門の悪口雑言からだと野田武藏の言葉から初めて知ったわけだが、直ちに「其百右衛門は自を縁組みしきりに申懸しに金内請給はぬ恨みにやこれ武士たる心入にあらず。然らは百右衛門を討べし」と、百右衛門の動機に思いつく。野田武藏も読者も初めて知った事情だが、これは娘の善良な性質を示している。そのような事情なぞまるでなかったにしても百右衛門はおなじことを言ったに相違ないからだ。意地悪な人間のねじくれた根性は、普通の善良な人間の判断に余る。いずれにせよ金内の名誉を救うためには娘と妾による見事な仇討以外には手段がないことを藩主や同僚の藩士もみなよく知っていたらしい。「野田武藏上意にてかけ付」の「上意にて」の語がそのことをはっきり示している。だから百右衛門が女二人に討たれたのは浪人増田治平の助力のおかげというより、殿様をはじめ藩内の大部分が女二人の側に立っていたからと言うべきである。(4)「翌日御僉義の時分おの〳〵日比に悪みあるなれば。老中諸役人口を揃てあしく言上申其家滅亡させける」はそのことをよく示している。非合法な私闘だったこの敵討が公的なものとして立派に承認され賞讃されたわけだ。

この一話から感じられるのは、正義の方は言うことに少々無理があっても勝ち、皆に憎まれている悪人の方はたとえ言い分が少々正しくても負けるという幾分不気味な真理である。最後に人魚の死骸が上ったという後日談でもこれは不思議でも化物でもなく、単なる「目なれぬ魚」に過ぎない。それでも金内の矢がささっていたから「皆〻感じてなき跡にてさふらひの名をあげける」とされ、悪人百右衛門の敗北は決定的となる。当時の読者でも、人魚の書き方が怪魚らしくない事に気付いた者は、一話の語るこのまことに微妙な事実を娯しんだに相違ないが、単純に人魚談として読み、悪の滅ぶ結末を悦んだだけの読者でも、決して誤った読み方とは言えないだろう。

注

(1) 岡崎義恵「西鶴の詩精神と散文精神」『芭蕉と西鶴』昭和二一年　支倉書林　六八頁

(2) 巻二の三をすぐれた一篇とする意見がある。江本裕氏はこれを『武道伝来記』中の「幾篇かの輝ける作品」の一つとし、巻一の第四「内儀の利発は替た姿」と併称している。「討たれた者が敵を狙い、念願を果たすと同時に狙われる者に逆転するという、果てしなく続く敵討の虚しさを吐露して深い感銘を感じさせる「身躰破る落書の団」」「西鶴武家物についての一考察―『武道伝来記』と『武家義理物語』との意識をめぐって」『日本文学研究資料叢書西鶴』昭和四一年六月　有精堂　一六九頁　巻一の第四を称揚するのは大賛成だが巻二の第三はちょっと解しかねる。その点をこれから述べていくつもりだが、それよりも江本氏の態度で貴重なのは『武道伝来記』三十二話には優劣があると言っていることだ。三十二篇が等価と考えては作者西鶴の意図を読み誤る。

(3) 前田金五郎氏によればこの点西鶴は『本朝年代記』によったらしいという。（岩波文庫版『武道伝来記』補注五二　昭和四十二年）これは貞享元年刊というから当時流布していたのだろう。

(4) 「中堂並内の娘の敵討ちはまことに恵まれたものであった。」井口洋『西鶴試論』和泉書院　平成三年　一〇九頁